

市史だより

F u k u o k a

29

史的再発見マガジン
[シダヨリ・フクオカ]

Spring 2026

TAKE FREE



特集

福岡市史的 まちあるき記録 20

WALK in
FUKUOKA
20selections

contents

10 市史編さん室トピックス

12 「新修 福岡市史」ナナメ読み

特集



福岡の「まち」を訪ねて20か所到達！

福岡市史的まちあるき記録20

文＝市史編さん室

市史編さん事業の内容などをお知らせするため、二〇〇五（平成十七）年から発行してきた「市史だより Fukuoka」ですが、発行開始から約四年が経過した第九号（二〇〇九（平成二十一）年）から誌面を完全にリニューアル。福岡市の中から一か所をピックアップして、そのまちの歴史を紹介する「地域特集」が始まりました。この地域特集を始めて、前回の第二十八号までで紹介したまちが二〇か所に到達しました！

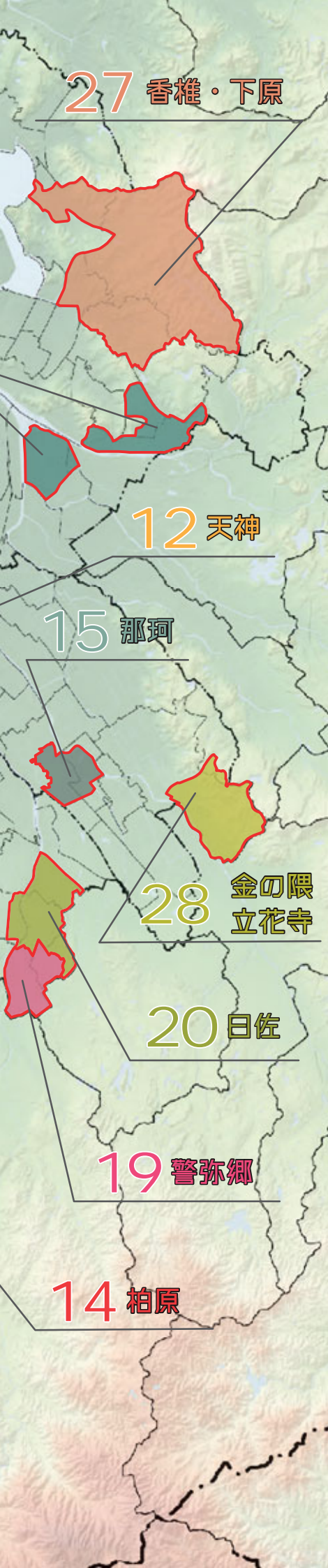
一七年の歳月をかけ、ようやく二〇か所。しかし左の地図を見ていただければお分かりのとおり、すべてを網羅するには遠く及びません。

まだまだ二〇か所、されど二〇か所。ということ、今回の特集はこれまでの特集地域とその取材のアレコレを振り返る「福岡市史的 まちあるき記録20」と題した総集編をお届けします。

詳しい特集の内容は、ぜひ各号をお読みいただくとして、今回は誌面には載せられなかった取材の思

いや、取材後変わったまちの様子などをお届けします。記事には出てこない裏話をお楽しみいただけます。次はどのまちが登場するか、楽しみにお待ちください。まちだけに！

※各号の内容は、掲載している表紙写真の隅にある二次元コードから読むことができますよ！





9 志賀島



17 多々良

1 能古島



11 西公園～長浜

2 大濠公園

18 北崎

22 シーサイドもちもち

21 警固・赤坂・桜坂

24 周船寺

1 七隈

25 野間・若久

2 女原・徳永・飯氏
千里・宇田川原

10 脇山～背振

「海の玄関」、志賀島を知る。

初めての地域特集ということで、すべてが手探りの第1回。選んだのは志賀島でした。

資料やこれまでの調査成果を持ち寄り、記事を書きました。もちろん現地に赴いての取材も行いました。

とくに印象的だったのは、特集でも登場した志賀島の盆踊りと、こちらはあまり紹介

できませんでした。奈多の海岸(奈多砂丘)です。

盆踊りの見学に行くと、地元の方が「どうぞどうぞ、よう来たね!」と温かく歓待してくださり、皆さんの優しさに触れた取材となりました。

奈多海岸は、現在ではフォトスポットとして全国的にも有名ですが、当時は本当に人っ子一

人おらず荒涼としていて、普段よく知っている博多

湾とはまったく違った印象でした。砂丘は現在よりも大きくて迫力満点!福岡市内の景色とはとても思えません。

今でも数年ごとの定点観測を続けていますが、現在の奈多海岸は、砂丘の砂が徐々に崩れて、年々その姿を変えています。危険なポイントもありますので、もしも行ってみたい

い!という方は、安全には十分注意してくださいね。



▲2009年
◀2023年



特集
「海の玄関」、志賀島を知る。

連載コラム「歴史万葉集」 / 連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより(巻頭・巻中・巻末・巻後・巻前)

「港、今昔」西公園〜長浜



西公園は現在、「眺望をよる楽しめる憩いの拠点」として、県による再整備が進んでおり、今後の変化が楽しみな一帯でもあります。

コラムの中で登場した櫛田神社浜宮は、ここから少し離れた博多ふ頭に位置していますが、取材に行った際、福岡の夏の風物詩である博多祇園山笠の「棒洗い」という行事が行われていました。あまり派手な行事ではないためか、この神事を見学に来られていたコアな山笠ファンの方から、レベル高めな同好の士との認定をいただきました。

能古島 博多湾に浮かぶ山

福岡市の観光地としてオスマの能古島ですが、特集では「地質」と「鹿垣」に注目してお送りしました。

取材では基本的にその地域をひたすら歩き回るので、この時も島じゅうを何度も巡りま

した。能古島の最北端で万葉集にも登場する「也良岬」にも実際に行って見ましたが、藪をか

き分け山中を進み、ようやく岬の先端に出ると、そこに見えたのは志賀島と広がる海のみ。古代の情景に思いを馳せ、まるで当時を追体験したような時間でした。

別の日には地元の方にかつての採石場跡(崖)を案内していたいたり、鹿垣を探して山中をさまよったり、



特集
能古島
博多湾に浮かぶ山

連載コラム「歴史万葉集」 / 連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより(巻頭・巻中・巻末・巻後・巻前)

「水と緑の里」脇山〜背振



とくに花乱の滝は修験者による修行地だったという伝承もあり、その雰囲気は独特なものでしたが、ちよつとした観光気分を味わったひと時でした。

第2回目は海から山へ一気に移動し、早良平野から背振山に繋がる早良区脇山に注目。福岡市の中心部・天神から車で30分ほど走ると、そこには豊かな自然が広がります。背後には金山、そして背振山を望む、のどかな地域です。近くには曲淵ダムや花乱の滝など、山地ならではの景勝地もあり、取材にも行きました。

天神「住む町」から「集う街」へ

近年の福岡市内でもっとも変わった場所といえば、間違いないこの天神地区でしょう。2015(平成27)年から始まった都市再開発誘導事業、通称「天神ビッグバン」によって、それまで天神の顔だったいくつものビルが一気に建て替わりました。特集をお届けした15年前には想像もしなかった変化です。

そんな天神地区の特集では、かつて福岡藩の上級家臣たちが「住む」場所だったのが、明治以降の開発で現在に繋がる「集う」場所となったことを紹介しました。

天神の地名の由来ともなった「水鏡神社」は、天神ビッグバンに伴い、





特集
北崎
西の古湊を巡る



歴史の郷
柏原を歩く。

取材では、福岡市域の中
この場所は、福岡市域の中
でもやや後発で、昭和50年代
に開発された地域です。
取材では、福岡市域の中
この場所は、福岡市域の中
でもやや後発で、昭和50年代
に開発された地域です。
取材では、福岡市域の中
この場所は、福岡市域の中
でもやや後発で、昭和50年代
に開発された地域です。

歴史の郷
柏原を歩く。

取材では、福岡市域の中
この場所は、福岡市域の中
でもやや後発で、昭和50年代
に開発された地域です。
取材では、福岡市域の中
この場所は、福岡市域の中
でもやや後発で、昭和50年代
に開発された地域です。

七隈 土ものがたり
七隈といえど何と云って
福岡大学...と思われるでしょ
うが、市史だよりの七隈と
いえば「土」!というこ
この号では七隈で採れる粘土
の歴史をこ紹介しました。
ある意味で異質な号でした
が、実はこの七隈回は他のど
号よりも長く反響が続いてい
る号でもあります。

ある時
は福岡市
「七隈=粘土」の図式は、引き続
き広めていきたいと思います。
ながら近年閉業されましたが、
「七隈=粘土」の図式は、引き続
き広めていきたいと思います。



多々良を耕す
この号の取材で、田畑を耕
す犁の開発に多々良が深く関
わっていたこと、そこで行わ
れていた「競犁会」という
犁の腕前を競う大会の存
在を初めて知りました。
この犁と競犁会の歴
史がなぜか心に刺さり、
力が入りすぎて本筋と
は直接関係ない犁の歴
史を調べ始め、危うく
「犁沼」に落ちそうに...



福岡市と太宰府市とを結ぶ主
要道である県道112号線(旧
国道3号)と県道31号線(高宮
通り)は、古代から重要な道と
して機能していました。15号で
は旧那珂町(那珂・麦野・東光
寺・板付・諸岡・竹下・井相田
の一带)を中心に、古くから交
通の要衝であり続けたこの地を
通る「道」をテーマに紹介しまし
たが、一帯はここ数年さらに大
きく変化しています。

2016(平成28)年には
那珂の福岡市中央卸売市場
青果市場が閉場し、跡地に
は「らぽーと福岡」が開業。
さらに竹下にあるアサヒビー
ル工場は佐賀県鳥栖市への移
転が決まり、今後はさらに
人の往来が増えそうです。
ちなみに表紙はA1画像
にも見えますが、暑い
中で撮影したれっきと
したホンモノです。



那珂
往來を見続ける街

そんな謎の犁熱もあいまつて
か、農業が機械化する前の時
代、多々良で犁の開発に人生を
かけた人々の人生を追いかける
ような取材は、物語を読むよ
うでとてもワクワクしました。
表紙の撮影では、かつて「暴
れん坊」と呼ばれた多々良川
の穏やかな表情を撮りたくて、
何度も現地に行きました。撮
影に夢中になるあまり、水に
はまったのはいい思い出です。

それまで意識してなかったの
ですが、「何となく福岡市の市
境部ばかりに注目しているな
...?」と自覚するようになった
のはこの号あたりからです。
福岡市の西端にある北崎地
区は、今ではインスタ映えする
スポットとして多くの人が訪れ
ますが、取材当時はそのような
ハイカラなものは一切なく、と
にかく海もまちも穏やかな港
町という印象でした。古代から

この地が船の停泊地として、出
港するための順風を待った場所
だったというのも納得です。
そんな北崎を一度海側から見
てみたいと思いい立ち、船で玄界
島に渡ったこともありまし
た。玄界島を一周歩き、やはり博多
湾内側と湾の外(外海)では景
色が違うなあと実感したは良
かったのですが、歩きすぎたせ
いか、帰りの船ではたった30分
で完全に酔ってしまいました。

また、正月の十日恵比須大
祭にもお邪魔しました。当日
は近くの保育園から園児たち
も参加して、地元の方による
たくさんさんの振り舞いもあり、
大変な賑わいでした。そして
おみくじでは何と大きな鯛が
当たり、正月からめでたい一年
の始まりとなりました。



北崎
西の古湊を巡る

警弥郷をつくる

実は当初、警弥郷というより「旧日佐村」に注目して調べ始めたのですが、日佐村の範囲がとて広く、19号・20号と連続して旧日佐村を特集することにしました。

最初に取り上げた警弥郷・弥永地区では、昔の日佐の様子を描いた「ふるさと絵史」という本がとて参考になりました。

取材では、この本を作られた広田久雄さん（警弥郷在住）のご遺族からお話を伺うことができ、とくに大正生まれの奥様は、昭和初期の貴重なお話をたくさん聞かせてくださいました。

この一帯は、地区のほぼ中心を新幹線が走っていることで、地区が東西に分かれています。そのことについても、実際に工事前後の様子を知る住民の

方々から、開発に直面した際の記憶を、実体験として伺うことができました。そして何といたっても表紙の写真です。ドローンによる撮影だったので、当時はまだ「ドローン」という言葉も普及しておらず、今と違って小型のものではなく大型機材による撮影でした。早朝から弥永小学校での撮影でしたが、児童の皆さんも興味津々でした。

これら先人の功績を手がかりに、独自の視点から日佐を探るため、かつて存在した牧場や、村役場の変遷について調べを進め、まとめました。

取材の中で思い出深く衝撃的だったのは、大正時代に書かれた伊勢参宮の様子を記録した個人の旅日記「大飛躍」との出会いでした。日佐の清水大次郎という青年が書いたこの旅行記には、昔の日佐の様子だけでなく、大正時代の観光旅行がどのようなものだったのか、そして県外（しかも伊勢！）へ出かけて行くことへの希望と感動が瑞々しい筆致で綴られています。残念ながら原本はなく後年活字化されたものですが、この日記を初めて読んだときにはこちらにもその感動が伝わって、思わず同行程での伊勢旅行を計画したほどでした（計画倒れ…）。

日佐さんぽ

日佐の中心にある日佐小学校の歴史は古く、創立百年を記念して、日佐村史ともいべき『日佐小学校一〇〇年誌』（平成13年）や『ふるさとの日佐一〇〇年』（平成14年）といった立派な記念誌を作られるなど、日佐は地元の歴史を遺し継承する活動が盛んな地区でもありました。

取材では、この本を作られた広田久雄さん（警弥郷在住）のご遺族からお話を伺うことができ、とくに大正生まれの奥様は、昭和初期の貴重なお話をたくさん聞かせてくださいました。

取材の中で思い出深く衝撃的だったのは、大正時代に書かれた伊勢参宮の様子を記録した個人の旅日記「大飛躍」との出会いでした。日佐の清水大次郎という青年が書いたこの旅行記には、昔の日佐の様子だけでなく、大正時代の観光旅行がどのようなものだったのか、そして県外（しかも伊勢！）へ出かけて行くことへの希望と感動が瑞々しい筆致で綴られています。残念ながら原本はなく後年活字化されたものですが、この日記を初めて読んだときにはこちらにもその感動が伝わって、思わず同行程での伊勢旅行を計画したほどでした（計画倒れ…）。

取材では、この本を作られた広田久雄さん（警弥郷在住）のご遺族からお話を伺うことができ、とくに大正生まれの奥様は、昭和初期の貴重なお話をたくさん聞かせてくださいました。



地域講座を開催しました。

旧日佐村を調査・取材した19・20号は、その後何度か地元の皆さんによる歴史講座にも活用いただきました。

まずは第20号の発行直後、2015（平成27）年3月に日佐公民館さんの企画で「日佐の歴史講座」が開かれ、講師として呼んでいただきました。当日は平日にも関わらず、なんと50

名ほどの皆さんが参加され、この地域の歴史への関心の高さを実感しました。

せっかくなので、もっと地元の方のお話を伺いたいと考え、講義はほんの触りだけに留めて、参加者全員で日佐の記憶や思い出話を盛り込んだ地図を作るワークショップを企画。班に分かれてそれぞれ個人的な思い出や体験、怪談に至るまで色んな話を出し合いました。会場は大盛り上がりで、最後には「日佐のなつかしMAP」が完成しました。

それからしばらく経った2021（令和3）年8月、今度と同じく旧日佐村の一つで、20号の取材でもお世話になった横手公民館さんから相談が。横手のシンボルマークを住民の皆さんで作ることになり、そのためにもまず地元の歴史を知って

らいたいとのことで、市史だよりをベースにした歴史講座を行いました。地元の皆さんにこうした形で市史だよりを活用していただけるのが何より地域特集を続ける意義だと感じています。





21号からは誌面をリニューアルし、ページ数が8ページから12ページに拡大！それまで4ページほどだった特集も6ページに増量し、より多くの情報を皆さんにお届けできるようにになりました。

リニューアル一発目の特集に選んだのは、市史だよりとしては珍しい、都心部の中央区警固・赤坂・桜坂を中心としたエリアです。

この辺りは昔からよく知っているエリアだと思っていまいたが、実際に歩いてみると知らない面がたくさん！とくに細い道が入り組んだ坂の上のエリアはあまり大規模な開発がされておらず、江戸時代の絵図と重なる道が多いため、ゆっくりと歴史散歩を楽しむには最適です。そしてここは隣接する「谷」という地名からも分かるように、鴻巣山からのびた尾根が入り組んだ谷地なんです。明治大正時代のジャーナリストであり政治家でもあった福本日南は、谷が入り組むこの場所を「四十八溪」と称しました。

地名も現在は「桜坂」「警固」となっていますが、以前は「蔵谷」や「駿河谷」、また「桜ヶ峰」「天狗松」など、その地になんだ地名がたくさんありました。こうした地名は今でもわずかにバス停や電柱のプレート（電柱場号）などに残されています。

四十八溪ウォーク 警固・赤坂・桜坂

誌面のリニューアルにともない、手に持って現地を歩いてもおけるよう、こうした古い道や小字名、また取材で見つけたイチオシポイントなどを入れた独自のマップを作成しました。こうしたマップは、この号以降の市史だよりでは目玉の一つとなっています。

おかげで発行後の反響も大きく、「地図を見て実際に歩いてみました！」という声をたくさんいただきました。

地図はなるべく正確に、ちゃんと歩けるものを作りたい！ということ、来る日も来る日も四十八溪に通う日々。意外と入り組んだ迷路のような道も、最後にはまったく迷わず目的の場所に辿り着ける「四十八溪マスタ」を自称できるまでになりました。

誌面をリニューアルして次の特集をどうするかと考えていた時、当時の福岡市博物館長であった有馬学先生から「博物館のお膝元であるシーサイドもちを市史だよりでやってみては？」という提案がありました。これには一同絶句。これまで福岡市内のいろんな場所を取

り上げてきましたが、すべて埋め立てた地という、まちができてまだ30年ほど（当時）の場所に、果たして歴史はあるのだろうか……？

詳しくは内容を読んでいただければと思いますが、結果的には「歴史」の捉え方そのものを考え直すきっかけとなりました。



取材当時、シーサイドもちというまちは、もうすでにある程度完成されていると思いましたが、ここ数年で建物が生まれ変わったり新しいホテルが開業したりと、現在でも少しずつ変化しています。

当時作った「建物図鑑」も、そろそろ更新しておかなければなりません。

人が集まる「ニュータウン」シーサイドももち

誌面をリニューアルして次の特集をどうするかと考えていた時、当時の福岡市博物館長であった有馬学先生から「博物館のお膝元であるシーサイドもちを市史だよりでやってみては？」という提案がありました。これには一同絶句。これまで福岡市内のいろんな場所を取

り上げてきましたが、すべて埋め立てた地という、まちができてまだ30年ほど（当時）の場所に、果たして歴史はあるのだろうか……？

詳しくは内容を読んでいただければと思いますが、結果的には「歴史」の捉え方そのものを考え直すきっかけとなりました。

取材当時、シーサイドもちというまちは、もうすでにある程度完成されていると思いましたが、ここ数年で建物が生まれ変わったり新しいホテルが開業したりと、現在でも少しずつ変化しています。

当時作った「建物図鑑」も、そろそろ更新しておかなければなりません。

ブックレット・シリーズになりました。

22号でシーサイドももちを取り上げてから約5年。地域特集が一冊の本になりました。2021（令和3）年に発売した『新修福岡市史ブックレット・シリーズ②シーサイドもちー海水浴と博覧会が開いた福岡市の未来ー』です。この本では、22号でも取り上げたシーサイドもちの「歴史」をさらに掘り下げ、より古い時代の「海

だった記憶や、新たに近隣の新しい歴史も織り交ぜつつ、新たな調査に約3年の月日をかけてまとめたものです。

埋め立て前の百道海水浴場と、埋め立て後の博覧会「よかトピア」を軸にしたことで、一つの地域の歴史の話に留まらず、福岡市全体の歴史まで見えてくる一冊です。



別冊シーサイドももちへは
 コチラからどうぞ▶

東西をにらむ峰 女原・徳永・飯氏・千里・宇田川原

最初に取材に訪れた際、峰の裾部に路傍の神仏や石碑がたくさんあることに気づき、この情報を全部盛り込んだマップを作りたい！と調査を始めたものの、その範囲の広さに絶望…。調査を複数で分担した結果、それぞれが1人で地蔵や祠堂を探

す羽目に。孤独で地道な作業が続く上に見た目はただの不審者という三重苦に陥りました。とくに飯石神社から南の山を登り筑前高校の近くに回り込むルートは難所、誰もいない山道は静かで心細く、おまけに冬場だったので寒くて

もちらつき心が折れそうに…。千里のうどん屋さんに這う這うの体で辿りつき、遅い昼食にありついたときは、心底ほっとしました。また取材中の3月に初めてカササギを発見。佐賀平野に棲息する鳥ですが、周船寺以南・以西エリアはやはり西の糸島・佐賀に向かって開けているのだなあと実感しました。



拓く、見守る、根を下ろす 野間・若久

野間・若久エリアでは、山の利用と開発をテーマに取材を進めました。古くから山(材木)をいかに活用してきたのかを紹介しましたが、とくに近代以降には新興住宅地の開発地として、思いのほか注目されていくことを知りました。

きっかけはたまたま見つけた不動産売買に関する戦前の新聞広告。これは調べると面白いかも…と調査を始めたものの、そうした記録はあまり残っていないため、まずは当時の新聞の不動産広告を、とにかく片っ端から集めること

に(これが想像以上に大変で、早々に後悔するのですが…)。現代でも新興住宅地に住所とは違った愛称が付けられて売り出されることはよくありますが、戦前にも同様の傾向がありました。

また当時の広告にはちよつと怪しいものもあり、健康志向により都会の喧騒から離れた人々へ向けた売り文句の中には

福岡と糸島の交差点 「西の玄関」周船寺

それでも何とか公民館の皆さんをはじめ、

周船寺地区は唐津街道に沿って古い家や商店が並び、昔からの道など多い地域。…と思っていたのですが、取材に訪れた2018(平成30)年はちょうど九州大学移転が完了したタイミング。大きく人口が増えてお

り、一帯は大型店舗やマンションが林立し、福岡市内でも、とくに子育て世代には大人気のエリアに生まれ変わっていたのです。まるで知らない景色のなか、浦島太郎状態での取材開始となりました。

古くから周船寺に住む方々からお話を伺うことができた。「周船寺を特集したい」と話すと本当に喜んで協力してくださり、出来上がった号をお届けに上がると「周船寺の誇りにします!」とまで言っていたほど!地元への心からの愛を感じました。周辺に遺跡や史跡が多いためか、周船寺は郷土の歴史への関心

が高く、昔から公民館での歴史講座などが盛んな地域でもあります。人口増に伴う中学校新設(周船寺中学校/2026(令和8)年度開校予定)のための校名・校章検討会議に際し、まずは周船寺の歴史を知るために市史だよりを活用いただき、また出前講座にも行かせていただきました。





みぎわの攻防 大濠公園前史

よりでは必ず対象の地域を訪れ、地元の方々にお話を伺うことを第一としていたからです。

年1〜2号の発行を続けて来た市史だよりですが、新型コロナウイルス感染症の流行(当時はまだまだ謎のウイルスでした)の影響により、2020年からの度重なるロックダウンで編集体制にも支障をきたすことになりました。市史だ

よりの一計を案じ、ある程度エリアが限定できて、資料からでも十分に新しいまちの姿を紹介することができる場所はないか?と考えた結果、選んだのが大濠公園でした。結果、資料を改めて見てみることで、江戸時代の堀に対す

る藩主と藩士の攻防など、これまであまり聞いたことがない新しい「大濠公園前史」となりました。

表紙は当然大濠公園ということとで、最終的には公園の北西にある舞鶴橋の風情ある写真を選びましたが、個人的には濠で偶然撮影した鳩vs鯉の写真が緊迫感があつて「ぜひ表紙に!」と推しましたが、編集会議であつさり却下されました…。



山に臨み、山から望む 香椎・下原

近年、駅前を中心とした大規模な再開発が行われた香椎地区。特集として取材を始めたのはちょうどそれらが完了したところで、まちはすっかり姿を変えていました。

香椎といえばそうした駅前や海側を想像しがちですが、この

号では山との関係に注目し、後背の立花山を遠景から撮影しよう、アイランドシティを自転車で走り回りました。

また、香椎下原校区の長谷ダム記念公園で行われた長谷ダムの「水がめまつり」も見学。長谷ダムは、三日月山と城ノ



越山(こしやま)の間に位置する福岡市水道用のダムで、このお祭りは「命の水」に感謝する事業として1995(平成7)年から行われています。

当日はあいにくの小雨模様でしたが、会場まで臨時バスが運行されるほどの賑わいで、地域のみなさんの出し物にあたたかい拍手あり、フェスのような出店ありで、活気あるお祭りでした。



丘陵に守られた実りとくらし 金の隈・立花寺

古くからこの地に根を張り果樹栽培を続けた人々がいたことを知り、まちの歴史はもろろんのこと、そこで生きる人々に焦点を当てた回となりました。

果樹栽培の歴史に注目したことからJA福岡市東部さんにはとくにお世話になり、関係者の

方を紹介いただいたほか、広報誌「PURE」の中で市史だよりの取材について紹介していただきました(2025年6月号)。

この地域でとくに印象的だったのは、飛行機が迫力で真上を通過していく景色です。表紙にも小さく写っていますが、実

際に見るともつと迫り来るような感覚があつて驚きました。

特集ではマップとして紹介しましたが、今里不動古墳の巨大な石室にも圧倒されました。自由に見学できるのが素晴らしい!石室の奥壁に彫られた不動明王は地域の信仰を集めているようで、石室内は周辺とは雰囲気がいさゝか異なっているように感じられました。

金の隈地区では9月の奉納相撲と1月の「鶯の水」を取材しました。どちらも由緒ある貴重な行事ですが、大人も子どもも一緒に楽しんでる姿が印象的でした。

地元の人々に接し、地域への思いに触られることが、取材の醍醐味であり、やり甲斐でもあります。

これからも
がんばります!

レポート

夏休みワークショップを開催しました

2025(令和7)年3月、『新修福岡市史ブックレット・シリーズ』の第3弾となる「ふくおか歴史探検隊」を刊行しました。ブックレット・シリーズでは、これまでに第1弾『わたしたちの福岡市—歴史とくらし—』では福岡の歴史文化を教え、伝える人々に向けての内容を、第2弾『シーサイドももち—海水浴と博覧会が開いた福岡市の未来—』では狭い地域の歴史を紐解くことが都市の大きな歴史と将来を明らかにすることに繋がることなどを発信してきました。

そして第3弾となるこの『ふくおか歴史探検隊』では、「てるお」と「もも」という二人の小学生が主人公。読者の皆さんは彼らと一緒に「歴史探検隊」の一員となって、福岡の歴史にまつわるナゾを解く探検に出かけます。街角の何気ない風景に、実は外国との交流で繁栄してきた福岡市の歴史が隠されていることを、読んでいる皆さんと一緒に明らかにしながら、自分で調べた地域の歴史を発信できる足がかりとなるような本を目指して作った一冊です。



今回、『ふくおか歴史探検隊』にあたり、主に福岡市内や市域周辺に住む皆さんにこの本を広く知ってもらうことを目的として、小学生の皆さんを対象とした夏休みワークショップを開催しました。ワークショップの内容は、どれも主体的に参加し、歴史について身近に感じてもらえるよう、本の中に掲載した実物大資料を中心として、体験やクイズ、関連する資料の見学も取り入れながら行いました。

今回のワークショップは3日間で合計4回、それぞれすべて違うテーマを設定し、定員は各回10名程度として開催しました。小学校3～6年生が対象でしたが、どの回も皆さん熱心に参加し、自由に考えてたくさん発言して、ワークショップを楽しんでくれたようです。



なかでも、2回目の「古代の文字の謎を解こう!」という回は、他の回を圧倒して応募が集中。大人でも難しそうな内容なのに、これは一体なぜ……?不思議に思い、保護者の方にこっそりお話を伺ったところ、子どもたちは「謎」や「謎解き」という言葉が大好きなのだそう!

「なるほど」と、まさにナゾが解けて膝を打った出来事でした。

ワークショップでは、大人でもちょっと難しいような歴史の内容もありましたが、身近にあるものに結びつけ、時には実物大の資料を手にとってみることで、新鮮な驚きとして楽しんでくれたようです。

今回は内容を厳選して4つのテーマを選びましたが、また次回は別のテーマでのワークショップや講座も企画したいと思います。



レポート

第20回 福岡市史講演会を開催しました

2025（令和7）年12月21日（日）、福岡市博物館講堂において第20回福岡市史講演会「戦前日本の政党政治と福岡の政治家」を開催しました。開催のお知らせを開始した直後から多くのお申し込みがあり、最終的には抽選にせざるを得ない状況となりました。ご来場をお断りした皆さま、本当に申し訳ありませんでした。講演会当日は、年末の差し迫った時期にもかかわらず、数多くの皆さまにご来場いただきました。

この講演会は、2015（平成27）年に刊行した『新修福岡市史 資料編近現代2 近代都市福岡の始動』と、2024（令和6）年に刊行した『資料編近現代3 モダン都市への変貌』に掲載した資料に加え、近年公開が進んだ新しい資料を用いて、明治期以降から戦前にかけての日本の政党政治の中で、平岡浩太郎ひらおかこうたろうや中野正剛なかのせいこうなど、福岡出身の政治家がどのような国家のあり方を模索したのかを明らかにしようと企画されたものです。

教科書などで「最初の政党内閣」とされる第一次大隈内閣わいはん（隈板内閣、明治31年）は、自由党と進歩党（旧改進黨）が合同してできた憲政党（明治31年）による内閣ですが、この大合同を裏面で画策したのが平岡浩太郎です。大隈内閣は間もなく瓦解し、憲政党も分裂しますが、旧自由党系を中心とする新憲政党は伊藤博文いとうひろぶみを党首とする立憲政友会を組織します。一方、玄洋社系かづらたろうは桂太郎による立憲同志会を経て憲政会（のち立憲民政党）に参加し、福岡において中心人物となったのが中野正剛です。この明治～戦前にかけて活躍した福岡出身の政治家たちを中心に、季武嘉也先生すえたけよしや（創価大学名誉教授）、有馬学先生ありまなぶ（福岡市史編集委員会委員長／九州大学名誉教授）のお二方に講演をお願いしました。

まず最初の季武先生による講演では、明治期を軸に平岡浩太郎を中心とした話が展開されました。先生によれば、近年の新たな公開資料から、平岡は隈板内閣の成立など、当時の重大な政治局面で大きな役割を果たしたことが分かってきているのだそうです。平岡の動向を詳しく見ていくと、従来の通説とは異なる側面が浮かび上がるとの指摘がなされました。

次に有馬先生による講演では、先ほどの季武先生の内容を受けつつ、平岡没後の流れとして、中野正剛の動向を軸に、玄洋社とその周辺の政治動向を再検討することによる新たな視点が提示されました。とくに、平岡浩太郎ひらおかこうたろう—安川敬一郎やすかわけいいちろう—中野正剛という繋がりを踏まえることで、明治期の憲政や政党展開が大正・昭和期の政党成立、ひいては昭和初期のいわゆる二大政党時代の実態にどのように繋がるかを明らかにしようというのが今回の講演の目的であり、それが資料研究によって具体化しつつあることが示されました。

いずれのお話でも、これまで教科書にも載って常識とされてきたような歴史でも、新しい資料の発見や公開によって少しずつ書き換えていかなければならないことが出てきており、そういった意味でも資料の公開や継続的な調査・研究が必要不可欠であると感じました。

また質疑応答では聴講者から多くの手が挙がり、本テーマに対する関心の高さがうかがわれ、大変充実した講演会となりました。

講演会の内容は、福岡市博物館公式 YouTube チャンネルで公開中です。

また2026年3月末に刊行の『市史研究 ふくおか』第21号には講演記録も掲載しておりますので、あわせてぜひご覧ください。

福岡市博物館公式 YouTube チャンネルは
こちらからご覧いただけます>>>>



▲季武嘉也先生（創価大学名誉教授）



▲有馬 学先生
（福岡市史編集委員会委員長
／九州大学名誉教授）



新修 福岡市史

ナナメ読み

その9 資料編 考古3

今回の
ナナメ読みは

麦わら帽子が見た弥生時代 — 板付遺跡、あらわる —

福岡市内にはいろいろな時代の遺跡が数多く積み重なって埋まっています。日本列島の歴史を語るために欠かせないものもたくさんあり、なかには教科書に写真入りで紹介されるものもあります。たとえば、博多区の板付遺跡(国指定史跡)。水田を使った米の栽培が始まり、日本列島が縄文時代から弥生時代へと生活スタイルを変えていく、目印になっている遺跡です。

本格的な調査は、昭和二十五(一九五〇)年に地元の考古学者中原志外頭(しげあき)が見つけた土器をきっかけに、日本考古学協会によって始まっています。その後、調査は同協会から福岡市に引き継がれ、今に至る長年の発掘で見つかった住まい・水田・墓の跡からは、人びとのくらしの全体が見渡せるようになりました(水田には弥生人の足跡まで残っていました)。現在は、当時の人びとが使った道具を見たり、暮らした米作りを体験したりできる史跡になっています(板付弥生のムツ)。

最初の本格的調査である日本考古学協会の発掘は、昭和二十六〜二十九年にかけて毎年八月に二週間ずつおこなわれたそうです。中心メンバーは、九州の考古学者と学生たちでした。見つかった資料は、現在は九州大学に保管されています。そのときの調査概要は、日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』(東京堂、一九六〇年)で報告されましたが、長い間、正式な報告書は刊行されていません。

『新修 福岡市史 資料編 考古3』(二〇二一年発行)の第一部では、この日本考古学協会の調査について、より詳しく資料が公開され、整理・分析されています。ここでしか見られない、待望の報告です。板付遺跡を特徴付けている環濠(かんろう) (集落を囲んでいる大きな溝)についても時期や当時の発掘位置が明確に説明され、遺構・遺物の写真や実測図も盛りだくさんです。

写真のなかには、当時の発掘の様子を撮ったものもあります。麦わら帽子をかぶり、土を掘つ



▲ 1951年の発掘の様子(福岡大学考古学研究室提供)

たり、記録をとったりする調査員の姿からは、真夏のじりじりとした暑さまでが伝わってきます。こうした地道な作業が、昔の人びとのくらしを文字通りに掘り起こして、今の福岡市民に繋いでくれたのだなあと、ついじつくりと見入ってしまいます。



2011(平成23)年3月刊行
A4判上製本(函入り)758頁
5,000円(税込)

電話申込み・店頭販売

福岡市博物館 ミュージアムショップ(福岡市早良区百道浜 3-1-1)
☎ 092-823-2800

店頭販売

ジュンク堂 福岡店(福岡市中央区大名1-15-1 天神西通りスクエア 2~3階)
※ 2026年8月に移転予定
☎ 092-738-3322
丸善 博多店(福岡市博多区博多駅中央街 1-1 JR博多シティ 8F)
☎ 092-413-5401

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だより Fukuoka」のバックナンバーも見られます!

福岡市史ホームページ ▶ <https://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <https://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。